群教セ	F09 - 01
	平15.217集

「ほっとルーム」を発祥の場とした児童の好ましい人間関係を育てる援助・指導のあり方

── 「ピア・サポート」と「相談カード」の活用を通して ──

特別研修員　　鈴木　雅之 （沼田市立池田小学校）

《研究の概要》

不登校傾向にある児童の予防的・開発的な側面から、認め合って助け合い、支え合える好ましい人間関係の育成に努めたいと考えた。「ほっとルームの時間」を設け「ピア・サポートトレーニング」をしたり、「相談カード」を子どもたちで解決する活動やチャンス相談に生かし、援助・指導を行ったりしてきた。これらの活動を取り入れることによって、様々な場面において、助け合ったり支え合ったりできる好ましい人間関係が育ってきた。

【キーワード：不登校傾向　ほっとルーム　学級担任　ピア・サポート　相談カード】

Ⅰ　主題設定の理由

５月10日現在、本学級には不登校の児童はいない。しかし、昨年度までは、年間60日近く欠席した児童がおり、10日を超える児童も数名いた。予防として、適切な援助・指導を行う必要がある。

一方、６月に行った自己肯定度インベントリーの結果、「学校場面での自己肯定度」は74.4％、「仲間関係での自己肯定度」は54.8％であった。特に、自己中心的で他とのかかわりが苦手な児童、自己表現力が乏しく感情を伝えることをあまり得意としていない児童がいることが浮き彫りになった。このことから、児童相互の理解不足を解消し、よりよい人間関係を醸成する必要があることがわかった。

そこで「ほっとルーム」での活用を「ピア・サポート」活動や相談活動が生かせる場とするなど、工夫しながら児童相互が支え合うことのすばらしさを理解させる援助・指導を行い、不登校傾向にある児童の予防的・開発的な側面から、認め合って助け合い、支え合える好ましい人間関係の育成に努めたいと考えた。

具体的には、「ほっとルームの時間」を設け、「ピア・サポートトレーニング」を行う。また、必要に応じて「相談カード」を活用し、悩みや不安の早期発見・早期指導へ役立てたり、児童の悩みや相談したいことに対する解決の糸口につなげたりしていくことで、児童の好ましい人間関係が育成される。「ピア・サポート」や「相談カード」を取り入れた援助・指導を通して、児童が自己理解を深め、自己存在感を持ち、自己指導能力を高めていけば、児童相互の理解が深まり、共感したり受容し合ったりすることができる学級集団へと、質的向上が図れると考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の見通し

「ほっとルームの時間」を設け、「ピア・サポートトレーニング」をしたり、「相談カード」を子どもたちで解決する活動やチャンス相談に生かしたりしていくことや、「ピア・サポート」

を取り入れた活動を行うことによって、児童はお互いのよさや大切さに気づき、好ましい人間関係を深めていくであろう。

III　研究の内容と方法

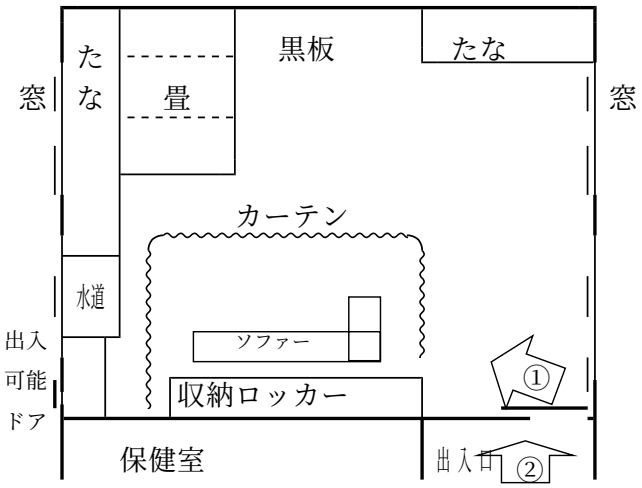
１　研究の内容

⑴　「ほっとルーム」を発祥の場とするとは

様々な場面において、助け合ったり支え合ったりする具体的な活動を考えたり、具体的な活動をする際の係つくりをしたり、サポーターの指導をしたりする場として活用する。サポーター中心の係活動を通して、支え合うことの大切さや思いやりの気持ちが育っていくことをねらい、活動の中心となるサポーターに、活動の方向性や企画・計画性、運営方法などをきめ細かく援助・支援していく中で、担任とサポーターとのコミュニケーションを図るとともに、支え合う集団としてのサポーターの役割を自覚させながら育成していく場とする。

⑵　「ほっとルーム」における「相談室」としての機能

必要に応じて児童と個別相談をしたり、保護者も相談に来られたりできるように、くつろげるソファーや間仕切りとしてのカーテンを整備したコーナーを設ける。



①相談コーナー

②入口の看板

図１　「ほっとルームの間取り図」【⇦; 写真撮影場所】

⑶　「ピア・サポート」で身に付けさせたい資質

本学級の現在の状況は、６年生といえども、まだまだ幼稚な言動が多く、人間関係が希薄な現状である。よりよい援助・支援活動が行えるとは言い難い。「ピア・サポート」のよさを生かし、人間関係の地盤作りが大切であると考える。

「ピア・サポートトレーニング」としては、児童の実態を考慮して、「ソーシャル・スキルトレーニング」や「構成的グループエンカウンター」を行う。「ピア・サポートトレーニング」や「ピア・サポート」をしていく中で、自己理解を深め、自己存在感を持ち、自己指導能力を高めていく。そして、児童相互の理解が深まり、悩みを抱え、困っている友達に共感したり受容し合ったりして、仲間同士の信頼関係が増していくと考える。そのために、児童の実態をしっかり把握し、ねらいを定め、対策を考え、見通しをもって、場面に応じた実践をする。さらに、行った実践を検討し、軌道修正が必要ならば再検討し、より効果的なスキルと合わせ実践を重ねていく。

また、学校全体として見たとき、その地盤作りの第一歩として、今年度は、６学年を中心に「運動会でのダンスや競技に関わる活動」、「学校よくし隊活動」等を他学年にも協力してもらいながら推進していく。

⑷　「相談カード」について

ア 「相談カード」記入日や相談日を定期的に設けるとともに、必要に応じてチャンス相談を行ない、「相談カード」に記入させる。自分の悩みに気付かせるとともに、子どもの思い を早めにキャッチすることに役立てる。

イ 「相談カード」は、記入することの負担が少なく、簡単に記入できるものを作成する。

ウ 「相談カード」には相談相手を記入する項目を設け、その時点で自分が誰に相談したいかを明記させることで、児童の共感者への信頼を相談前に確認することができ、来談者・相談者がより深いところで話し合うことができるものと考える。また、「相談カード」をもとに、そのことについて一緒に話し合ってくれる子どもを募る。ときには、必要に応じて編成した班による児童相互の話し合いを設けることで、より多くの教師や友達との交流が広がり、深まっていくものと考える。さらに、話し合ったことから、自分の気づきを書かせる「ふりかえりカード」も活用していくことで、学級生活において自己の存在が認められ、楽しく充実しているという気持ちにつながり、これらの活動を通して、個人の成長や児童のコミュニケーション能力が向上し、学級集団の質的向上につながっていくものと考える。

２　研究の方法

図２は、「ピア・サポート」の実践と「ほっとルーム」を活用して「ピア・サポートトレーニング」や「相談カード」を取り入れた実践の全体構想図である。

⑴　研究の対象

小学校６年生　男子 13 名
　　女子 13 名 計 26 名

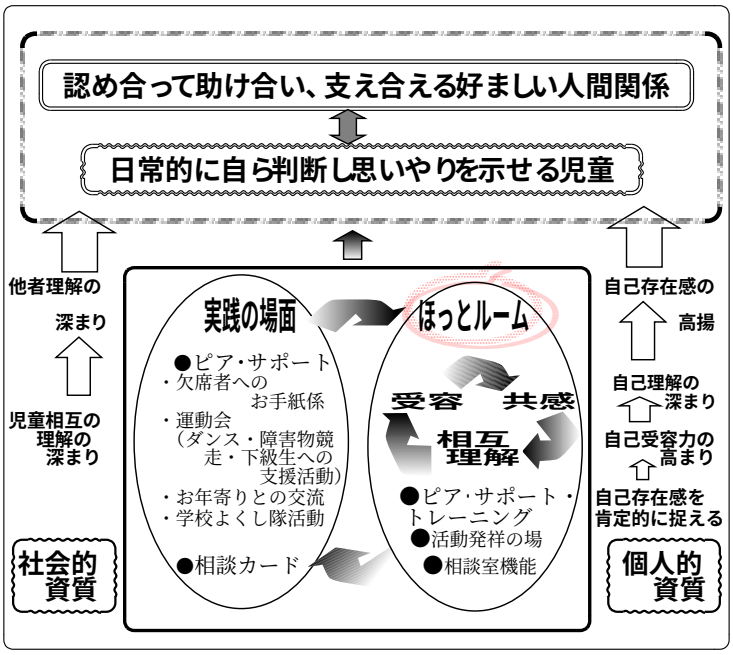


図２　研究の全体構想図

⑵ 研究の実施計画

表１　研究の実践計画

	項　目	時期	内　　容
1	実態調査および生活班の編制	６月上旬	①学校生活に関するアンケート調査（対象：児童） ②生活班の編制
2	実践Ⅰ 【生活班による学校よくし隊活動】	６月上旬	①ピア・サポートトレーニング実施（人間知恵の輪） ②計画 ③実践Ⅰ【生活班による学校よくし隊活動】 ④振り返り
3	実践Ⅱ 【運動会に関わる活動】	６月中旬～ ７月上旬	①ピア・サポートトレーニング実施（そうだねゲーム） ②計画 ●「ほっとルーム」環境整備Ⅰ
		７月上旬	◎相談カードの記入（対象：児童）
			③ピア・サポートトレーニング実施（いっしょに遊ぼうゲーム）

			④振り返り（計画の修正）
		夏期休業中	●「ほっとルーム」環境整備Ⅱ
		８月下旬 ～９月	⑤実践Ⅱ【運動会に向けて】 ⑥振り返り（対象：児童・保護者）
4	実践Ⅲ 【「相談カード」から出されたこと】	１０月～ １１月下旬	①相談カードの記入（対象：児童） ②【相談カードから出されたこと】 ③【振り返りカード】
5	実践Ⅳ 【お年寄りとの交流】	１１月下旬 ～ １２月中旬	①ピア・サポートトレーニング実施 ②計画 ③実践Ⅳ【お年寄りとの交流】 ④振り返り（対象：児童・保護者）
6	有効性の確認	１２月中旬	研究の有効性の確認

※相談カード記入・「ピア・サポート」は、上記以外にも必要に応じて実施。

Ⅳ 実践の概要及び結果と考察

１　生活班による学校よくし隊活動

学級全体で「学校のよくしていきたいところ」を話し合った結果、「普段掃除していないところを掃除しよう」ということになった。生活班ごとに別れ、班長（サポーター）を中心に自分たちで、具体的に「学校のよくしていきたいところ」を話し合い、各階にある教材室や相談室（「ほっとルーム」）の清掃・整理・整頓、壁の修理、などをしようという意見が出され実施した。ピア・サポートトレーニングで行った「友達集め」で「一人になることの寂しさ」を味わったので、班としての集団を大切にし、トレーニングのねらいを念頭において協力して作業するように、支援を重ねながら実施してきた。「振り返り」の場面で、『「学校よくし隊活動」は清掃・整備活動をすることなのか』という疑問が出され、サポーターを中心に「ほっとルーム」で話し合った。『清掃や整備を進んでしていくこともちろん大切であるが、６年生としてどんなサポート活動ができるかを考えて６年生らしく生活していく』という意見が出された。

具体的には、学級として『清掃時間には毎日１年生の清掃サポートに男女１人ずつ行く活動』を実践していくことになり、１年間この活動は続けられた。その他、班ごと、時には、個々に考え『困っている同級生や下級生を助けていこう』ということとなった。写真（省略）は、休み時間１年生の輪の中に入り、一人で遊んでいた１年生を仲間に入れ、『和』を考え合わせた活動をしているところである。このような取組は、年間を通して行われた。

この活動を通して、上級生として下級生に対して困ったり、心配したりすることに関してピア・サポーターの知識と理解を増すことができたことが、児童の振り返り用紙からうかがえた。

資料１　児童作文より

１年生が寂しそうにしていたので、声をかけてみた。初めは、声をかけるのに勇気がいったけど、すぐにぼくに飛びついてきていっしょに遊べた。このときから、用がないときは、（６年生の友達をさそって）ほとんど毎日２０分休みや昼休みに１年生と過ごすようにしてきた。とつぜん大きな声をだしたり、わがままをいう１年生もいて大変だったけど、けがもなく、仲間はずれもなくすごせたことが何よりだ。これからも人が困っていたら自分にできることをできる範囲でやっていきたいと思う。

２　運動会に向けて

運動会（５・６年生種目）では、ダンス班と障害物競争班にわかれて、一人一人がサポーターとして活躍できるような活動場面を取り入れた。図３は、ダンス班の実践を例に挙げ、「ピア・サポート」が広がる様子を活動内容【ささえあい】や実践を通して子どもたちび得たもの【まなび】、出された心のつぶやき【つぶやき】を図式化したものである。

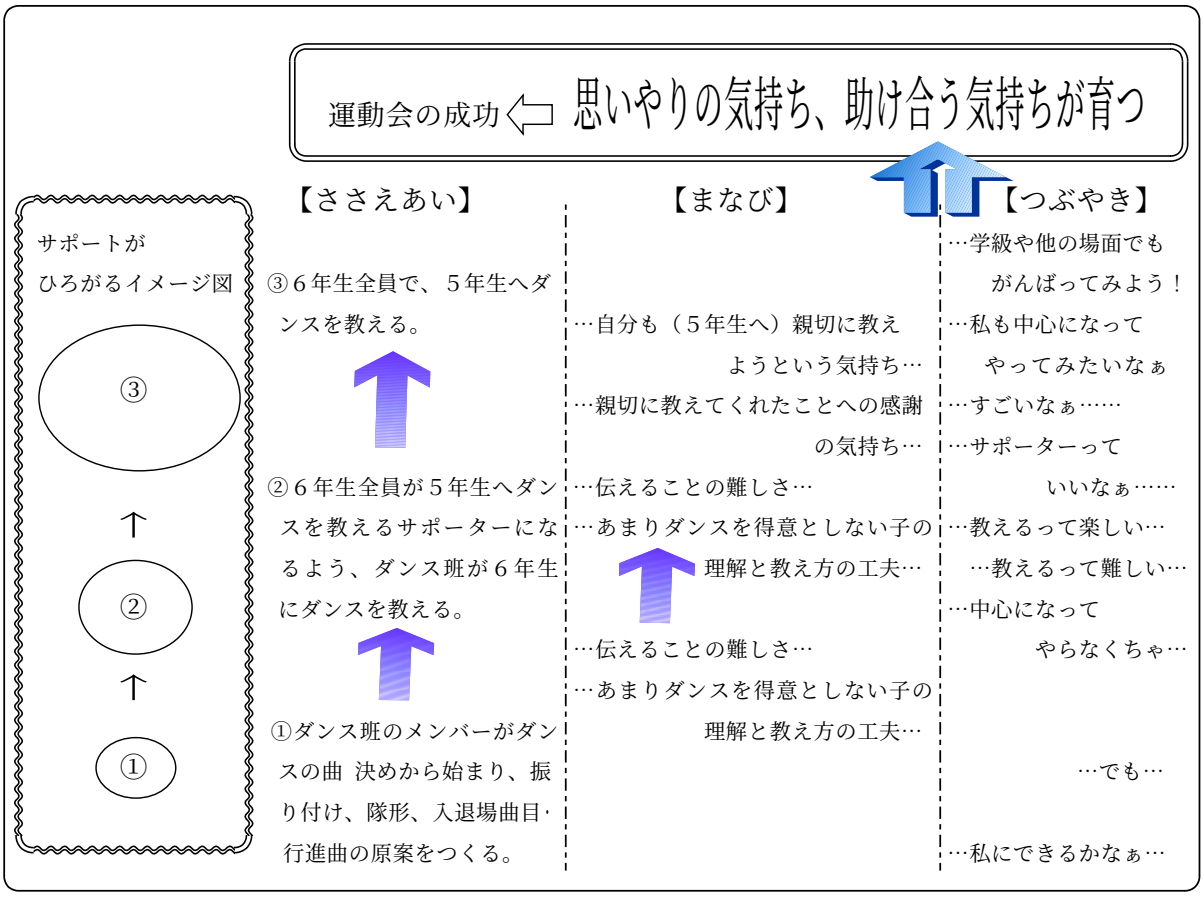


図３ 運動会の成功

資料２　児童作文より

６年間の中で、１番よかった運動会。最高だった。その中でも、ダンスが心に残った。６年生のダンス班が中心になって作り始めたダンス。最初は、全然できないと思うくらいできなかった。でも、みんなで頑張って、完成させた。本番では、観客から「すごい。」「よくここまでできたね。」などといろいろほめてもらい、とてもうれしかった。その他にも障害物競走は、みんなで顔を真っ白にして、おもいっきりやった。みんな一人一人が一生懸命やったから、いい運動会ができたと思う。小学校最後の運動会が一番よかった。最高の運動会だった。

資料３　保護者の感想より

・１学期に企画してから家で何度か練習している姿を見ていたのですが、２学期に入り、５年生に教え、短い期間であれだけの動きをよくマスターできたと思います。今までにないダンスを見ていてかっこよかったです。障害物競走を初めて見ました。私の場所がちょうど借り物の位置だったのですが、どの子も借りた物を返しに来るときは,「ありがとうございました。」と最期まで礼儀を忘れないのには、思わずほほえんでしまいますね。

・先生に言われなくても次々と係や仕事をやっていたと思います。応援は、１年生から５年生誰にでも声を出していました。さすが６年生と思いました。子どもの成長には目を見はるものがありました。一人一人が一生懸命になった小学校最期の運動会は、皆の心にしっかり刻みつけられたと思います。

資料２・３での感想から、思いやりの気持ち、助け合う気持ちが育ち運動会が成功したと考える。運動会に向けて、トレーニングをし、計画を立て、サポート活動をし、振り返るサイクルを「６年生だけに行うサポート活動（図３②)」と「５年生に行うサポート活動（図３③)」の２度にわたり繰り返したことがよかったと推測される。特に、②における振り返りをしっかりし、②のときよりもきめ細かい③の計画を立てたことが効果的であった。資料４は②の振り返り用紙に児童が記入したものである。

資料４　6年生だけに行うサポート活動 図４ ）の振り返り用紙より

自分たちが考えた振り付けを思っていた以上に（６年生へ）うまく伝えられなかった。５年生へ教えるのが不安になってきた。５年生に教えるときは、大きくはダンス全体の流れ確認しながら、小さくはステップごとに一つ一つをしっかりと教えられるように、計画を立てることが大切だということがわかった。

５年生にサポートする過程では、「６年生がとてもわかりやすく丁寧に教えてくれてうれしい。驚いたのは、６年生の方から、私たちがよくできないところを『いっしょにやらない？』と誘ってくれ、放課後、教えてくれたことだ。『ほっとルーム』でのダンス練習はとても楽しい」さらに、「来年、自分たちが今の４年生にうまく教えられるか不安に思うけど、今から楽しみ」という声が５年生から聞かれた。以上のことからも「振り返り」そして「次の計画」の課程を深いところまで考えたことが有効であり、「ピア・サポート」が広がってきているものと推測される。

３　相談カード」から出されたこと

「相談カード」から出されたことの実践は、図４のとおりである。

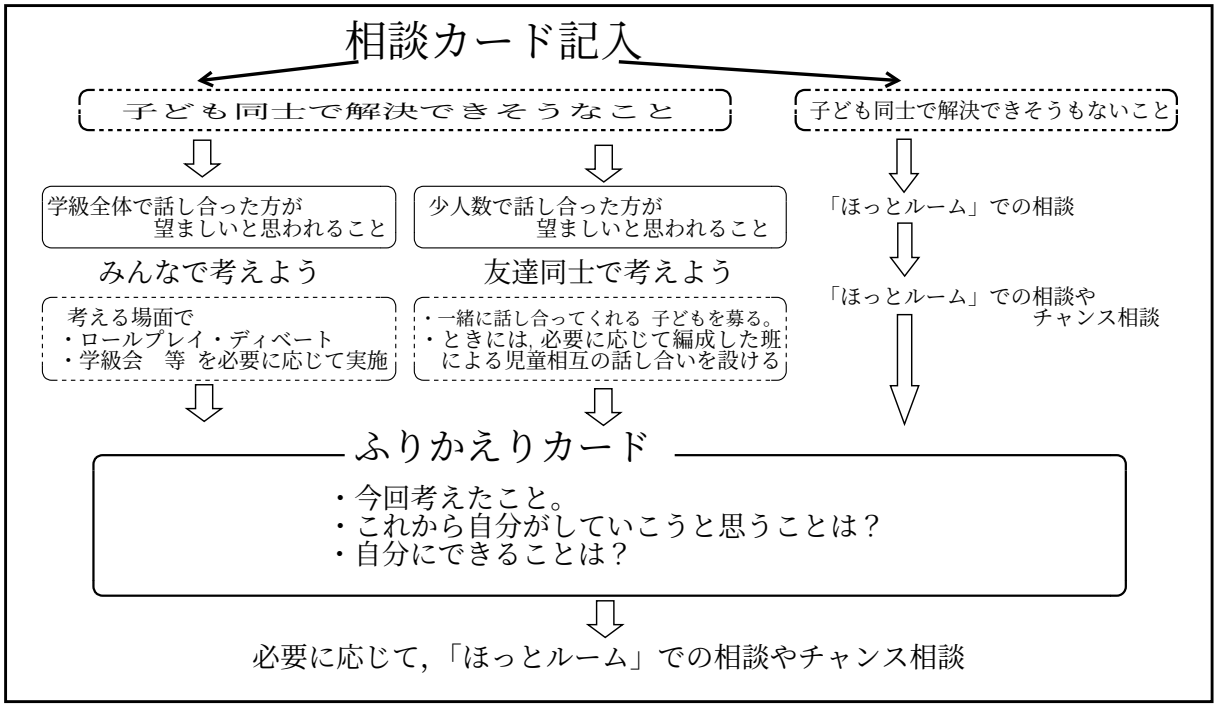


図５　相談カード」から出されたことの流れ

「相談カード」から出された「気のせいかもしれないけど，クラスのだいたいがいやな視線で（自分のことを）みて，何でかわからないけど，不安」という、学級全体で話し合った方が望ましいと思われることの事例を振り返ったとき、「気にすること気にしないことは，人によって違うことに気づくとともに，相手も自分も尊重することの大切さに気づき，自分の気持ちや考えていこうという気持ちを大切であることがわかったトレーニング『気にしない・気にしない』が有効であったという意見が、サポーターによる「相談カード」を通した話し合いの中で出された。「『相談カード』から先生に相談するだけでなく、困っている友達や悩みのある友達に対して自分たち自身で解決していくことが大切である」という意見が出され、そのため

には、これからもトレーニングを積み重ねていく必要があるという意見でまとまった。

４　お年寄りとの交流

児童は、「お年寄りとの交流」の振り返り用紙の中に、「自分たちがお年寄りになったつもりで、教えたり、教わったりしたことがとても楽しかった。このトレーニングがとてもよかった」と書かれており、振り返り用紙をもとにした話し合いでは、同じような意見がたくさん出された。サポーターを中心に一連の流れを企画・検討してきた中で、今回はとくに「トレーニング」の実施内容がとても有効であったものと思われる。

資料５　毎日の日記の保護者記入欄より

> 今回のお年寄りとの交流を通して、子どもたちは、協調、他を思いやる心、感動する心などを養ったように感じます。子どもの話や祖母がパソコンで作った作品をとてもうれしそうに見せてくれた表情からそのことがうかがえます。

５　実態調査及び生活班の編制

学校生活に関するアンケート調査として、自己肯定度インベントリーを使用した。６月に行った集計結果から、肯定度の高い児童から低い児童のバラツキのないように、児童を配属し班編制を行った。班で話し合って決めた班長をサポーターとして活動を行ってきた。この班編制の活動は、清掃・給食当番活動を中心に、実践Ⅰ「学校よくし隊活動」も行った。

表２は６月と12月に行った自己肯定度インベントリーの集計より抜粋したものである。様々な実践を通して学級全体における児童の肯定度があがったことがうかがえる。

表２　自己肯定度インベントリー集計より

場面	肯定度（%）	
	６月	１２月
一般自己	５５．１	７６．９
仲間関係での自己	５４．８	８８．５
学校場面での自己	７４．４	９２．３

子どもたちとともに自己肯定度インベントリーの集計結果を考察した。「この１年間、『ピア・サポート』と『相談カード』の活用を通した活動が、自分自身、そして学級全体としてもよかった」という意見が多数出された。年間を通して、本研究の有効性が確認できた。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

様々な場面において、助け合ったり支え合ったりする具体的な活動を考えたり、活動をする際の係つくりをしたり、サポーターの指導をしたりする場として「ほっとルーム」を活用し、支え合うことの大切さや思いやりの気持ちが育ってきた。

本研究を通して、「トレーニング」をし、「計画」を立て、「サポート活動」をし、「振り返る」サイクルにおけるその一つ一つの過程及び「トレーニング」や「計画」と「サポート活動」とのかかわりがとても大切であることがわかった。特に、「振り返る」活動が重要であり、次のサイクルの基盤となることが明らかになった。また、『「相談カード」から出されたこと』の一連の流れにそって、効果的に進められてきたことが、教師のアドバイスを受けながらも、できる範囲で自分たちで解決していこうという姿勢が育ってきていることからもうかがえ、有効であることが証明された。

今後は、「ピア・サポート」の考えを取り入れた学活・道徳や総合的な学習の時間の年間計画を作成し、実践に努めていきたい。

参考文献

・諸富祥彦編著 『カウンセリングテクニックを生かした新しい生徒指導のコツ』 学研(2001)
・中野武房・日野宜千・森川澄男編著『 学校でのピア・サポートのすべて』 ほんの森出版(2002)
・國分康孝監修 『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる（小学校)』 図書文化（2000)